

皆で大切にしてきた鴨川湾のハマグリ漁

鴨川市漁業協同組合

鴨川蛤組合副会長 鈴木 良太郎

1. 地域及び漁業の概要

千葉県鴨川市は房総半島南東部、太平洋側に位置し、岩礁帯と砂浜で構成される美しい海岸線から丘陵地帯に至るまで変化に富んだ豊かな自然環境がある。主な産業は漁業、農業および観光業で、農業では「長狭米」というブランド米の他、東京から一番近い棚田「大山千枚田」がある。観光では全国的にも有名な鴨川シーワールド、日蓮聖人ゆかりの史跡などがある。

市内の鴨川湾には砂浜が広がり、前原海岸と東条海岸の2つの海岸がある。鴨川湾は都会から近い海水浴場やサーフィンポイントとしても人気があり、鴨川市はサーフィンなどを目的にした都会からの移住者も多い(図1)。

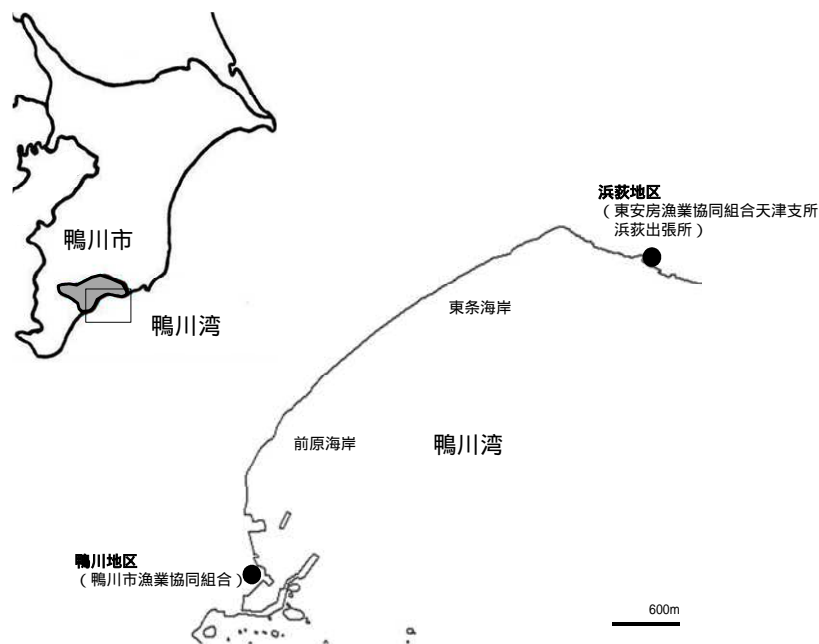


図1 鴨川湾の位置

漁業は鴨川市の基幹産業の一つであり、生産量の多いカタクチイワシ、ブリ、サバをはじめ、キンメダイ、アワビ、イセエビ等多種多様な魚介類が水揚げされる。

私の所属する鴨川市漁業協同組合では、正組合員 409 名、准組合員 851 名の計 1,260 名（平成 26 年度末）により、まき網、定置網、一本釣り、刺網、採貝藻等の多様な漁業が営まれている。平成 26 年度の水揚量は約 8 千 3 百トン、水揚高は約 24 億円にのぼり、県内有数の規模を誇っている。

私たちが営むハマグリ漁業は、他ではあまり見られない手動の「ろくろ」により鉄の爪のついた「まんが」と呼ばれる漁具を巻上げて、ハマグリ（標準和名：チョウセンハマグリ）とナガラミ（標準和名：ダンベイキサゴ）を漁獲している（図 2～6）。

鴨川湾におけるハマグリ漁は江戸時代から行われていた記録があり、現在、鴨川市漁業協同組合（鴨川地区）と東安房漁業協同組合天津支所（浜荻地区）の所属漁業者が入り会いで操業している。

平成 26 年度の鴨川湾のハマグリとナガラミの水揚量の合計は、約 20t と規模は決して大きくないが、この地域の魚種を豊かにするとともに、冬季に営む貴重な漁業となっている。



図 2 操業の風景



図 3 ろくろ



図 5 ハマグリ



図 6 ナガラミ

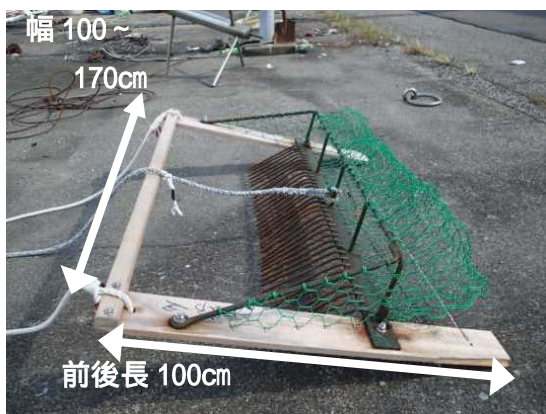


図 4 まんが

2. 研究グループの組織と運営

私の所属する鴨川蛤組合は鴨川市漁協所属の漁業者 34 名（平成 26 年末）で構成されており、主な活動は操業に関する協議やハマグリ・ナガラミの種苗放流である。蛤組合への入会は、漁協の組合員で放流事業に参加するなど要件を満たした後、認めることとしており、平均年齢は 60 歳（平成 26 年末）だが、30 代以下の若手漁業者は全体の 24% で近年増加傾向である。

一方、浜荻地区にも東安房漁協所属の漁業者で構成されたハマグリ資源管理部会があり、当グループと同様の活動を行っている。この 2 つの組織が資源管理に努めながら、鴨川湾においてハマグリ・ナガラミ漁を入り会いで操業している。

3. 研究・実践活動取組課題選定の動機

鴨川湾は海岸線約 4 km と海岸線が約 60km あり県内の大産地である九十九里浜に比べると漁場が狭いため、資源も限られている。一方、この狭い漁場内で 2 つの地区、併せて約 50 隻の漁船が入り会いで操業を行うことから、なるべく皆で平等に資源を利用する必要があった。

このため、私たちは限りある地先資源を平等かつ持続的に有効利用することにより、若手漁業者の育成や漁業種類の多様化による漁家経営の安定を目指し活動を行っている。

4. 研究・実践活動の状況

(1) これまでの取組状況

鴨川湾のハマグリ・ナガラミ漁は、昔から 2 地区の漁業者が入り会いで操業するため、漁期、操業時間、漁法、漁獲サイズ制限、出漁日の統一など様々な決まりごとを設ける必要があった（表 1）。操業に関する取り決めは、2 地区の会長もしくは役員で毎年会合を開き、話し合いで決定している。私たちはこれまで次の様な活動に取り組んできた。

表 1 操業の取り決め

項目	取り決め
漁期	11月1日～12月末日
操業時間	朝8時～正午
漁法	ろくろ曳きによる操業（動力機器使用禁止）
制限殻長	ハマグリ：5cm以下
出漁日	2地区会長が当日の海況等により協議し決定
休漁日	第1・3日（鴨川）、第1・3土（浜荻）は全体休漁（各々の禁漁区操業はこの限りではない）
禁漁区	各禁漁区は、各地区の漁業者で管理する

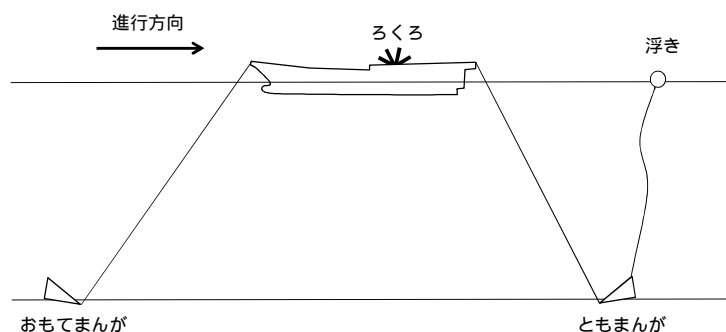
ろくろ曳きによる操業（動力機器の使用禁止）

私たちは、昔ながらの手動方式によるろくろ曳きで操業を継続することで、漁獲圧の上昇を抑制している。

手動方式のろくろ曳きはかなりの力仕事で、寒い時期でも操業中は汗だくになり、暑

い時期の操業は難しいため、従来から 11 月と 12 月の冬期に行っている。

漁法は、まずアンカー代わりの「ともまんが」を船尾側へ落した後、船を 30～40m 走らせ、「おもてまんが」を船首側に落とす。次にろくろを手動で曳くことで、船は船尾方向へ進み、「おもてまんが」にハマグリが集まり、それを引き上げて漁獲する。約



5 回に 1 回は「ともまんが」も引き上げ、中のハマグリを回収する。この一連の作業を午前中の 3～4 時間で 15 回ほど行う(図 7)。ナガラミの操業もほぼ同様に行う。

図 7 ハマグリ操業方法

ハマグリ of 殻長制限

平成 21 年に県の規則が改正され、ハマグリ of 採捕制限サイズが殻長 5 cm 以下から 3 cm 以下に変更された。この変更でより小型の貝も獲ることができるようになったが、小型貝を保護し資源の維持を図るとともに魚価の低下防止を期待して、以前の殻長制限を引き継ぎ、現在も 5 cm 以下のハマグリは漁獲していない。操業時に 5 cm 以下の小さい貝が混獲されてしまった場合は、自主的に集めて交代制で代表者が再放流している(図 8)。



図 8 再放流するハマグリ

禁漁区の設定

2 地区ではそれぞれ禁漁区を設定している。目的は、ハマグリ種苗を集中的に放流することにより、漁獲の確実性を高めることと、ハマグリ of 母貝場を形成することで、稚貝 of 再生産を促し、資源を増加させている。

なお、鴨川地区 of 禁漁区では漁期中に年 1 回の操業を行い、漁期後、ハマグリ種苗 of 放流を行っている。

ハマグリ of 種苗放流

鴨川湾におけるハマグリ of 種苗放流は、昭和 43 年頃から旧天津漁協(現東安房漁協天津支所)および鴨川市漁協で行われるようになったのが始まりであり、現在も 2 漁協における種苗放流は継続して行われている(図 9)。鴨川湾では昔からハマグリが生息していたが、継続的な種苗放流を行うことで漁獲量は安定していると感じている。

現在、種苗は県・市の補助を受けて漁協が購入し、漁期終了後の 1 月に自分たちで禁

漁区に放流している。

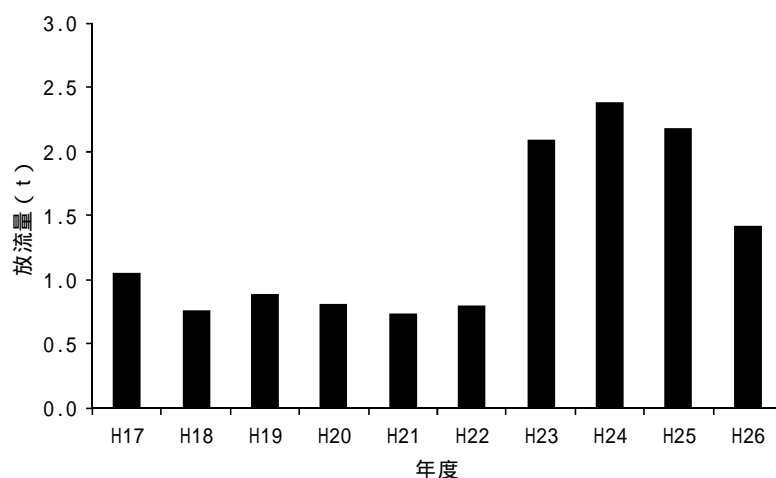


図9 鴨川湾におけるハマグリ放流量の推移

鴨川湾のナガラミの単価向上

鴨川湾ではハマグリの他にナガラミも漁獲される。この地区のナガラミはサイズが比較的小さく、単価も低いことから、これまであまり積極的に操業が行われてこなかった。さらに、ナガラミが漁場に多いとハマグリの生息域が狭まると経験的に感じていた。

一方、九十九里地域では、高価格で取引されるものの資源は少なかったようで、平成14年度に水産事務所の普及員から、鴨川湾のナガラミを、九十九里地域への移植用種苗とすることで、資源の有効利用ができるかもしれないと提案を受け、さらに、九十九里地域の漁業者と話し合ったところ、単価の向上も期待できた。

そこで、どの程度資源があるかを把握するため、水産事務所および県水産総合研究センターの協力のもと、鴨川湾のナガラミ資源調査を行った結果、平成14年度および15年度で19.7tおよび29.2tの資源があることが推定された。このような調査を行いながら、移植は平成14年度から現在まで継続している。

(2) 取組の成果及び波及効果

漁獲量・収入・品質の安定

鴨川湾のハマグリの漁獲量は多少の変動はあるものの、これらの取り組みにより概ね年間10tで安定している(図10)。

漁獲金額については、過去10年間平均で約2,000万円である。鴨川湾全体のハマグリ漁業者数が毎年約50隻なので、一隻あたり40万円ほどの収入となる。

金額は多くはないかもしれないが、この漁は手動方式であるため燃料代が少なく済むことや、ろくろ、まんが等に対する初期投資以外ほとんど経費がかからないことから収益性が高く、年間操業日数が約 20 日間と短い割に冬の確実な収入につながっている。

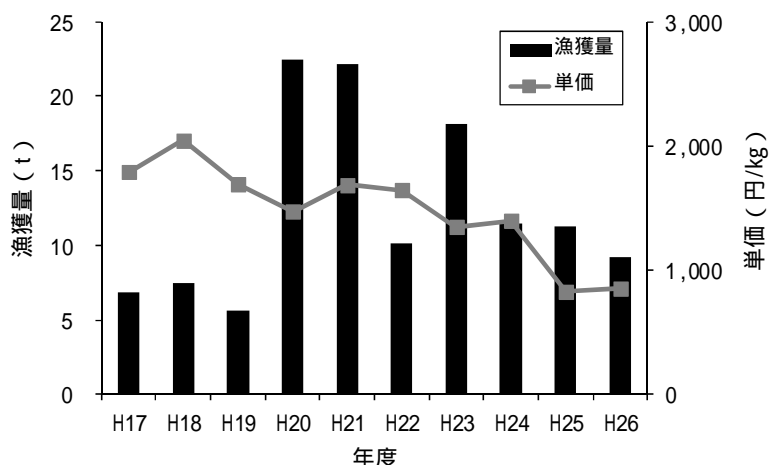


図 10 鴨川湾におけるハマグリ漁の漁獲推移

鴨川湾のハマグリは、県水産総合研究センターの調査から、漁獲時に足部を殻で挟み切断することで商品価値が落ちる「足切り（舌切り）」と呼ばれる貝の発生率が、曳網速度が遅いため低いと聞いている。これは、手動方式による操業を続けてきたことが役立っていると思っている。

ナガラミについては、移植種苗用とする前の平均単価は約 250 円/kgであったが、移植を始めた平成 14 年度以降、約 550 円/kgと向上しており、経営の安定につながっている（図 11）。

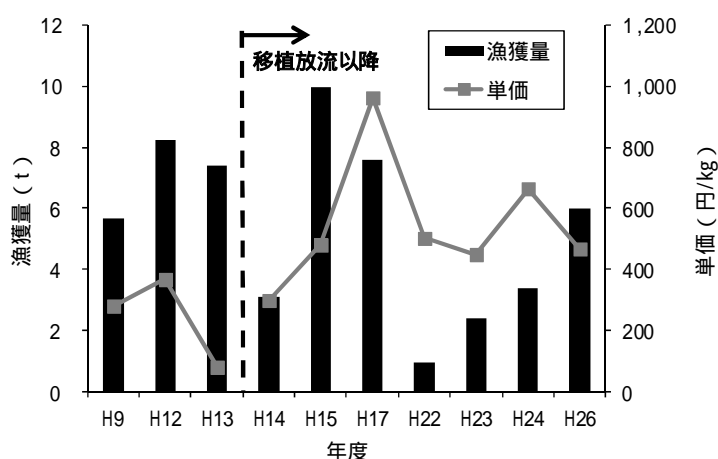


図 11 鴨川湾におけるナガラミの漁獲推移
（H10, 11, 16, 18, 19, 20, 21 年度は漁獲せず）

資源管理意識や浜の協調性の高まり

鴨川湾で長年ハマグリ・ナガラミに対する資源の利用や管理に取り組んだことで、私たちの地区では資源保護や管理の重要性が定着するとともに、浜の協調性の意識が高まっているように感じる。現在、漁協ではハマグリ放流以外にもマダイ、ヒラメ、アワビおよびサザエの種苗放流を行っており、放流にはベテラン漁師と若手漁師どちらも積極的に参加している。これらの取り組みを通じ、ベテラン漁師は若手漁師の相談役になる一方で、若手漁師も先輩漁師に分からないことを積極的に聞くなど、漁師間のつながりも強くなっている。

また、2地区の漁業者が同じ取り決めで漁場を利用することにより地区間の関係も円滑になり、同じ漁場を利用する他の漁業においても良い影響があると感じている。

若手漁業者の参入

鴨川市漁協では新規漁業就業者が漁業に定着しやすい就業の流れがある。地区にはまき網、定置網漁業など雇用型の漁業があり、毎年一定数の新規漁業者が就業している。まき網や定置網漁業の就業者(乗り子)は要件を満たせば漁協組合員として認められるため、乗り子から自営の漁業形態(一本釣り、採貝藻、エビ網漁業)に転業する者もいる。

ハマグリ漁は新規就業者の漁業種類の幅を広げる漁業の一つとなっており、自営漁業への転業者など約10名の若手漁業者が当組合に入会している。

漁業種類の多様化

鴨川の漁場はとても豊かなものであるが、アワビ・イセエビ等、昔に比べると資源の減少を感じている魚種もある。私たちは今回紹介した鴨川湾のハマグリ・ナガラミ漁をはじめ、地先の資源をうまく活用しながら、年間を通して様々な漁業を営むことで、一つの漁業への集中を防ぐとともに経営の安定を図り、各々の漁業を持続的に行っていきたいと考えている(表2)。

表2 鴨川の年間操業形態の一例

漁業種類	魚種	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
釣り	サバ	←→											
海士	アワビ・サザエ					←→							
刺網	イセエビ・サザエ ヒラメ等	←→											
ろくろ曳	ハマグリ・ナガラミ											←→	

5 . 今後の課題や計画

近年、ハマグリ単価は一時期に比べ下がっているため、単価の向上対策を考えていく必要がある。これまで外部からの需要に頼っていたハマグリ単価を地元の消費拡大により少しでも向上させるため、まずは地元産業祭に出店するなどして、積極的にアピールしていきたい。

ナガラミについては、夏場に種苗放流先の要望があることと、旬であることから単価の向上を見込めるこの時期の水揚げも考えている。

鴨川湾のハマグリ・ナガラミ漁業は、漁業者間での問題が起きないように漁獲物が平等に分配され、さらに漁獲が維持されるよう長年試行錯誤が行われてきた。その結果、現在にも受け継がれる手動方式のろくろ曳き・漁期統一・殻長制限・種苗放流等の取り組みが、今日まで続いており、地先資源の有効利用、若手漁業者参入、漁業種類の多様化などに役立つ重要な漁業となっている。先人たちの努力により守られてきたこの大切な漁業を持続的に営んでいけるよう、今後も鴨川地区および浜荻地区の2地区漁業者間の連携を一層強化していきたいと考えている。